

2013.11.14.

有山裕美子（工学院大学附属中学校・高等学校）

本稿は、2013年11月22日の21会 Web ダ・ビンチセミナー（思考力テスト部会主宰）に先立ち、有山先生（工学院大学附属中学校・高等学校 司書教諭）が執筆。前回の第1回21会 Web ソクラテスセミナー（21会学習理論部会主宰）で議論された21世紀型教育の21会学習理論をまとめた内容になっている。

今回のセミナーで、基調講演者である思考力テスト部会の本橋先生（聖学院）はご自身が実践した思考力セミナーについて、思考力テストに埋め込まれた学習理論を検証する。その際、現状21会で議論している学習理論の構造をモノサシとして行う。

そのモノサシについて、同部会メンバーの有山先生が本橋先生とコラボするにあたり、執筆したのが本稿である。

課題解決の過程においては、まず、解決するための問いを立てる。その際、自ら問いを立てること、そしてその問いが興味・関心と結びついていることは、大変重要である。なぜなら、自ら興味・関心を持つことは、より明確な課題解決への、大きな原動力となるからである。そして、そのためには、当然のことながら、問いを立ち上げることは楽しくなくてはならない。

ところが、思考力テストにおいては、問題(場面)の提示は、出題者が行う。そこから子どもたちに問いを立てさせるわけだが、それでは、もともと関心のない場に子どもを連れていったとき、そこらいかにして問いは生まれるのか、言い換えれば、いかにして用意された問いを、子どもにとって興味・関心のあるものへと導いていくことができるのだろうか。ここから私たちの、思考力テストへの思いは出発する。

ところで、思考する上で、既知の知識が重要であることは言うまでもない。しかしながら、その知識はすでに身につけて活用できるものでなければならない。何か問題にぶちあたり、試行錯誤する過程で、われわれはその既存の知識を活用(再現)する。こうして自ら蓄積してあった知識が様々な文脈とつながり、すぐに取り出せる形で問題解決に重要な役割を果たすとき、もはやその知識は、思考と呼ぶにふさわしい。このことは、「知のネットワーク」とも大いに関係がある。知が様々な形で結びつき、紐づけられ、ネットワーク化する

ることにより、知識はより確かな形で蓄積されていく。「知のネットワーク」が新たに増えていけば、やがて知識と思考は一元化するのである。

さらに、知識と思考のネットワークの構築には、そのテクニックは欠かせない。たとえば物事をカテゴリ化するとき、比較し、共通項と差異を明確にしていく必要がある。ここには、理由＝因果関係のネットワークがある。このように「比較」「因果関係」「カテゴリ化」は、思考力を育てる上で重要な構成要素となる。そして、実はこの「知のネットワーク」を形成する過程において、今まで気づけなかったことがそこに広がれば、そのこと自体「差異」であり、「サプライズ」である。つまり、「サプライズ」は、知識と思考を結びつける関係において生まれるとすることができる。

さて、ここで最初の問いに戻ろう。もともと関心のない場に子どもを連れていったとき、そこからいかにして問いは生まれるのか、言い換えれば、いかにして用意された問いを、子どもにとって興味・関心のあるものへと導いていくことができるのだろうか。答えはこうである。知識と思考を結びつけるときに、そこに「サプライズ」を生み出す仕組みを用意すればよい。それは、「知のネットワーク」化であり、知識と思考がひとつになるためのプロセスでもある。私たちはその仕組みを、思考力テストの中に埋め込んでいきたいと考える。

すなわち、子どもが自ら興味を持ち、自ら問いを立ち上げる仕組みである。この場面が、思考力セミナーや授業などであれば、対話や議論の場を共有することも可能だろう。そこで生徒たちが自分なりのネットワークをたぐり寄せることにより、問いが立ち上がるのである。また、意志や配慮も「関心」という場を形成する。子どもたちの興味・関心を引き出し、「サプライズ」を演出することにより、自ら楽しみながら問い立ち上げさせること、そこが重要である。

サプライズから生まれた問いは、さらにサプライズを生む。そこでは、いわゆる予定調和ではない、課題解決能力が試されるはずである。このように、自ら問いを立ち上げ、自分の持つ既存の「使える知識」を総動員しながら、課題に取り組むことができるような仕組みこそが、思考力テストには必要である。

それでは、このようにして生まれた問いを、どのようなテクニックを使って、思考・吟味し、解決に導くかを、思考力テストを使って例示したい。また、問題解決のプロセスの最後には、必ず自らの学びをふり返り、評価することも重要である。自分で自らの学びを自己分析し、次につなげていく。思考のプロセスを何回もたどり、知のネットワークを広げていくことで、知識は確かな思考として、定着していくからである。